

教員としての原点を見つめて

須藤 桃代

北海道立旭川高等看護学院教員

4月は学校にとって、1年の始まりの月です。今年は何年になくまだ雪がちらつき、ようやく頭をのぞかせた露の臺(ふきのとう)も雪の帽子をかぶり、土筆はまだ芽を出せずにいます。でも吹く風にはさすがに春の息吹が感じられ、もう少しで木の芽が吹き出して山が新緑に染まるだろうと、春の訪れを一日千秋の思いで待っています。そんな、日本で一番北にある助産婦学校から、学生との悪戦苦闘の日々を紹介いたします。

学生の姿を見つめること

3月15日、15名の助産婦の卵たちが、殻を破ってよちよち歩きで卒業してゆきました。これからは、妊産婦に教えられ先輩たちに鍛えられて、ヒナから一人前の若鳥へ成長してくれるでしょう。

卒業期の学生からのカリキュラム評価は、例年シビアで落ち込みますが、教員に対する学生からの期待と激励の言葉だと真摯な気持ちで受け止めています。学生たちは看護学校での学習をもとに、入学時すでに、学びたい知識、獲得したい技術、理想の助産婦像を見事に自分の言葉で表現しています。

ある学生は「技術に心が加わった“技”を持ち、それに知恵のある、さらに自分らしさを失わない、そんな助産婦になりたい」と書いていました。しかし、その学生の卒業時の到達に関する文章では、「あんなになりなかった助産婦なのに、実習をとおして尊敬できる助産婦に出会えず、反対に助産婦に憧れを持ってなくなっている」とありました。学生

の本当の姿をみず、内なる苦しさの声を聴けていなかったことに気づきました。学生の求めていた思いやりと優しさを与えられなかったことが、残念でなりませんでした。

ほめることと、叱ること

学生からの評価を前に、どう学生に関われたのか、その前に学生とどう共感できたのかを自らに問う時、教員として、そして人間としての未熟さに思いが至ります。産婦の診断ができるか、分娩介助の手技がどうか、褥婦のケアができるか、実習指導にやつきになって半年が過ぎてしまう気がします。また、新人類と呼ばれ、年齢が開くばかりの学生に対して、社会性や忍耐力や気力やらと、一方的に求めてばかりいたように思います。

“2つ叱って、3つほめ、5つ教えて、よい助産婦育め”とばかりに、これ激励に努めますが、“ほめること”と“おだてること”は違うのに、ほめるつもりがおだてる結果になっていたり、即時的に叱らず、感情的になっていることもあり、上手に“ほめること”と“叱ること”のなんと難しいことでしょう。

以前、水泳を習っていた時のことです。クロールの息継ぎのできない私に、あるインストラクターは熱心に、“できていないこと”を教えてくださいました。できていないことは自分でもわかっているのですから、いわれてもかえって落ち込むだけです。水泳を止めたくなくなりました。そんな私に、もう1人のインストラクターは“できてい



ること”を見つけてほめてくれました。そうすると、それが励みになって練習を続け、難しかった息継ぎができるようになったのです。

細かいテクニックを教えられるより、できるまで繰り返し練習するエネルギーを必要とする時もあるのです。黙ってみていて、その人のよいところを見つけて、それを当人に気づかせる。忍耐のいることですが技術教育には大切なことです。学生個々の知識や技術のレベルに違いもありますが、それぞれの学び方の個性をいかに活かすか頭を悩ませます。

人間としてのリフレッシュ

教員として学習や研修も大切ですが、視野を広げ社会人としてのセンスを磨くために、リフレッシュが必要になります。夫と2人、年に1回は南の島へ出掛けます。スクーバダイビングを満喫し、その土地の人たちと文化に接するのが目的です。最近ではバリ島が印象に残りました。ダイブショップで、シャイで親切なインストラクターに出会いました。澄んだ瞳をして、とても優しく、勉強家で、ガイドとしてのプロ意識を持っていました。痒いところに手が届くようなサポートで、その見事さに感動しました。

ダイビングをとおして、水の下に隠された地球と出会い、海の生き物と出会うことができます。とりわけ、かわいらしい魚たちとの出会いは心が和みます。中性浮力で海のなかに漂っていると、

羊水に浮かんだ胎児のような感覚で、とても解放感があります。命をサポートしてくれるインストラクターや海の仲間との出会いなど、数々の出会いをダイビングは私に与えてくれます。

またバリ島は、ご存じのようにリゾート地としての顔だけでなく、人たちは篤い信仰心に支えられ神々と生活しています。生活水準は日本の昭和20~30年代くらいでしょうか。でも、つましい暮らしのなかから毎日神への供え物を供し、感謝の祈りを忘れず、神のために踊ります。贅沢に慣れた日本人が、ずっと昔に置き忘れてきた人間として大切なものを垣間見た気がしました。

このように、ゆったりとした時間のなかで心と体をリラックスさせ、人間としての原点を踏み外さないようにしたいと思っています。教員としてはまだまだ未熟で反省ばかりですが、学生は周りの人々からいろいろなものを吸収して、自ら伸びてゆきます。卒業後、大きく成長した姿をみせてくれた時、教員としての幸せをしみじみ感じます。失敗からの学びやチャレンジ精神を大切に、これから七転び八起きで頑張ってくれることでしよう。

* * *

次は、厚生省看護研修研究センターの助産婦学校の教員養成課程で、教官として幅広くエネルギーに活躍している高橋弘子さんにバトンタッチします。ユニークで楽しいお話をお聞かせ下さい。